

第1巻をおえて

第1巻では研究者の心構えとともに最低限必要とされる統計検定の基礎知識について述べてきた。たいへん重要なポイントを多々含んでいるので、是非これからも心に留めて、研究に役立てていただきたい。統計検定のさらなる理解のためには、各種統計検定の原理をある程度知る必要があるが、それは第2巻で述べることにする。統計検定は多様であり、多くの種類があるので難しいと思うかもしれないが、基本的な考え方や原理は共通している部分も多い。したがって、いくつかの主要な原理を学べば、その他の理解は容易になる。そこで、第2巻ではすべてを詳細に述べるのではなく、研究者にとって重要と思われる部分を重点的に述べていく。それでも、かなり込み入った話がでてくるが、しっかり学んで欲しい。



本文中で何度か述べたが、研究は有意差をだすことを目的に行っているわけではない。研究者が求めるべきは、あくまでも真実であることを忘れてはならない。統計はそのための一手段に過ぎない。統計検定は客観的判断のために用いるが、結構、主観の入り込む余地がある。したがって、統計検定をうまく利用すれば、微妙な測定値は有意差をだす、ださないをある程度コントロールできる。しかし、それはあくまでも真実を追求するためであって、無理に有意差をだすためではない。この点を特に強調することで、第1巻をおえたい。

池田郁男